

コップレーホルの展覽會

I. O 生

Boston Copley Society の第二回展覽會の出品は、繪畫二百餘點彫刻十餘點、其數に於ては驚くに足らぬが實質は何れも立派なものばかり、まだ上野あたりでは見られない。重なる作家は、Frank W. Benson. J. J. Enneking. John Sargent. Dwight. W. Tryon. E. H. Barnird. Eastman. Johnson. W. Witman. James McNeil. Whistler 等へ、油繪には肖像畫が多く、水繪、パステルには風景畫が多い、其中で目についた繪を擧げ様なら、Benson氏の作二面、氏は當地の小兒繪の名家で、その描法は顔料をカンヴァスに叩きつけたやうで、近くで見れば何だか判らぬ、極めて大膽なやり方、ホワイトの使ひこなしがお得意で、白衣の影の色の旨さ驚嘆に値へする、一寸見れば粗雑なやうだが、其粗雑のうちに含まれてある意味は無量で、何時迄見て居ても飽きない。Sargent氏の肖像畫は三點、そのうち畫家 M. Chase氏の肖像は等身大で、パレットを持つた老畫伯が、その暗い鳶色のバツクの中から今にも歩み出して來さうな活々とした好ましい繪で、この前に立つては、肖像畫は詰らぬものだなんて言へなくなる、顔一つ畫くに五千弗を拂はせるといふ氏の筆だから、場中を壓してゐるのは無理はない。Tryon氏は風景畫家で今賣出しの花形、近年の作は何れも霧に包まれたやうな要領を得ぬ場處のみであるが、其繪は決して輕

薄でも不親切でもない、こゝにある繪は“Spring time”と題されて、やうやく芽ぐんだ、枯木林が、高き地中線に一列に並び、前は露に濡れたやうな若緑の草原で、極無造作な頗る詩趣に富んだものである、眞偽は別らぬが、氏の作畫の順序として傳ふる處によると、最初多くの畫稿をつくり、さて畫くべき圖柄が極まると、これに應じた場處及材料のスケッチを澤山集め、いよいよ着手となると、カンヴァスの面をヴァミリオンのやうな熱色で一面に塗り、其上へ漸次筆を下してゆき、繪を明るき處に置いて、自分は遙か離れて暗き中より椅子に倚つて眺めてゐる、時として四五日もたゞ見てばかり居て筆を執らぬこともある、勿論其間他の仕事をするのではない、實際筆を持つ時間よりも考へる時間の方が多く、それ故一年に幾枚も出來ないとの事である、繪として出來上つたものを見れば何でも無いが、名工の苦心は容易ならぬものである。Barnard氏は“Blue Haze”といふ繪を出した、題名の示すがごとく、コバルトか、つた景色畫で、この先生は何時も寫さうと思ふた景色を、四角な枠から見て其儘切抜いたやうに描くので、寫實派の極端をやつてゐる、それ故其景色の中に人物が欲しい場合でも、實際居なかつたら描かない、不用な場合でも居たらドンナ處にでも有の儘描き込む、少しも自己の意志といふものを加へない、併しそれに掲はらず、其繪に對すれば決して寫真を見るやうに無意味のものではなく、やはりよい感じがする。Whistler氏の作は裸體の人物畫、油繪、水彩、パステル一枚宛で、何れも一尺に満たぬ

小さなもの、これによつて氏の技倆を窺ふことは出来ぬが、さすがに大家の面影は偲ばれる、この三點はデトロイトのフレヤ氏の愛藏品で、一枚一萬弗でも手放さぬとの事である。同じパステルの裸體畫に Kronberg 氏の小品があるが Whistler

氏に比べて遜色のないよい出来と思つた。水彩

畫の中々は、Burleigh

氏の "Poort" Veere が

よかつた、この先生はボ

ストンで當時評判のよい

人である。Moser 氏の

『湖上の月』は氣の利いた

描法で、Crocker 氏の

"Willows" は色紙半分

丈げ描いてある、吾國の

若い人達に見せたら直ぐ

眞似をするであらう。彫

刻では、此地の Kitson

夫妻の作が一寸目を惹い

たが、記憶にのこる程よいものではない。この會は四週間開場

さるゝそうだが、いつも看覽者は澤山詰かけてゐて、夜分も電

燈の光で見せてゐる、米國では一般に夜る繪を見ても差支ない

ものとして居る。(外遊日誌のうちより)



母鳥 乳山 房霞 山筆

美術は悪く言ふと國民的娛樂に過ぎぬものであるが、唯だ娛樂としても非常に國民の性格上に重要なものである。人間は働くか休むか、勞働するか娛樂するか、二者その一に居らねばならぬ。斯う云ふ譯であるから、勞働ばかりしてゐるとどうしても耐えられないものである、樂しみといふことが必要である、其娛樂に美術的趣味を加味すると高尚なものになるが、美術的趣味がないと野蠻になる、其結果は國民の墮落となり、或は國家の滅亡を來すことになる。穩健にして規則正しき娛樂、殊に美術的娛樂を國民に與ふことは、國民として殊に缺く

べからざるものである。今後文明の事業は益々發展しなければならぬ——其活動に堪へるやうに、國民を健全に發達せしむるには日本人の特徴である處の美術思想を養成して往かなければならぬと思ふ。(浮田和民氏『國民としての成功』日本及日本人)